東京湾東岸域における縄文貝塚と埋葬

高　梨　友　子

1．はじめに

「なぜゴミ捨て場たる貝塚から、埋葬人骨が出土するのか。」このような疑問は、誰でも一度は持つのではないだろうか。貝塚に関する一般向けの講演会などでもよく出される質問である。これについては通常、「後に投棄された貝殻から大量のカルシウムが溶けだして、偶然そばに埋葬されていた人骨が保護されていたから」というような説明がなされる。しかし、「偶然」と片づけてしまうには、今日までにあまりにも貝塚から人骨が出土しすぎてはいないだろうか。きちんと埋葬された遺体は、後のゴミの投棄というざっくばらんな行為によっても、乱されないまま残っているものなのだろうか。

逆に言えばこれは、貝塚を「ゴミ捨て場」と考える限り「偶然」と言わねば説明がつかない現象であるといえよう。では、貝塚から埋葬人骨が出土するという事実をそのまま受け止め、敢えてその前提に立たずに貝塚と埋葬のあり方を見つめ直してみるならば、どうなのだろうか。縄文時代の貝塚と埋葬行為との間に、実は有機的な関連が見えてくるのではないだろうか。

小論ではこのことについて、特に貝塚が集中しており、「貝塚文化」[1]とも称される東京湾東岸域[2]の貝塚を取り上げ、埋葬人骨との関係を改めて追ってみたいと思う。

2．貝塚と埋葬人骨をめぐる研究略史

貝塚から人骨が出土するという事実は、日本で貝塚研究が始まった当初から知られていた。ここではまず、貝塚と埋葬人骨との関わりについて行われた研究を概観してみる。

1877（明治10）年、E・S・モース氏による大森貝塚の調査は、日本の考古学および人類学にとって大きな布石となったことは言うまでもないが、貝塚と埋葬について考えてみるときにも、大きくわけて2つのポイントが挙げられる。第一に、貝塚がゴミ捨て場であるという考え方を日本にもたらしたということ、そして第二に、貝塚から人骨が出土するということを「貝塚はゴミ捨て場である」という〝定義〟に乗っ取って解釈したということである。第一の点については、19世紀半ば、デンマークにおける貝塚調査で、貝塚は自然堆積ではなく人為的なものであり「台所の汚物の堆積」と発表されたことを知っていたモース氏が、大森貝塚を車窓から発見し、これを「ゴミ捨て場である」と判断したものである。これは日本でも何の抵抗もなく受け入れられ、以後今日に至るまで適用され続けているものである。そして第二の点については、モース氏は大森貝塚で発見された人骨について、散乱骨であり、しかも動物による噛み傷がついていたことなどを挙げ、貝塚がゴミ捨て場であるという理解に即してこれを「食人風習の証拠」と捉えるに至るのである。

これ以後しばらく、貝塚研究は、県内の堀之内貝塚や加曽利貝塚で層位的な発掘がなされる一方で、人骨だけは貝塚から切り離されて、人類学的興味プラスαの研究がなされるということになる。

そのような中で、「何故貝塚というゴミ捨て場から完全な人骨が出てくるのか」という疑問をめぐる、大串菊太郎氏と小金井良精氏の議論があり、注目される。大串氏の、ゴミ捨て場に死体を遺棄したこともあったろうとする解釈（大串　1920）に対し小金井氏は、人骨が多く貝層下から出土するということ、甕被葬や甕棺葬、副葬品の存在などから、発見される人骨は決して遺棄されたものではなく「人骨の在る場所は卽ち、石器時代の墓場であ」り「人が更はり、代が變はって、数年の後には全く忘れられて仕舞つて、其の上に不用物が棄てられることもあらう。或は亦不用物棄場の側に墓場があつて、貝塚が漸次拡大せられて墓場の上に被さつたといふこともあらう」（小金井　1923）としている。ただし、貝層中から人骨が出るという場合に限っては、松村瞭氏の談話を引きながら「依然不用物棄場であつたところの貝殻のあるところへ、屍を葬つたことがあつたかもしれぬ。（中略）この所を少し掘つて貝殻を以つて覆つたであらう」（同）と述べてい

る。だがその理由については、貝のあるところはザクザクして掘りやすいからと想定しているだけで、何故貝殻で覆ったのかということにまでは言及されていない。この場合、それ以上は単なる想像の域に達してしまうからだろう。これらの議論については、「何故貝塚から埋葬人骨が出土するのか」という問題は「何故ゴミ捨て場から埋葬人骨が出土するのか」という問題と必ずしも同じでないということを認識する必要があるように思われる。それは今日においても言えることで、ゴミ捨て場から埋葬人骨が出土する理由を考えている限りその限界ラインは極めて低く、この大串氏、小金井氏らの解釈以上の説は期待できないだろう。

昭和に入ると、貝塚は聖地・墓地であるという説が出てくる。ジェラード・グロート氏の「貝塚は捨處であるか」(昭和16・1941年）である。氏の見解は先の小金井氏のものとは違って、貝層堆積自体に墓の意味を持たせるものであった。貝殻が多く装飾品に用いられること、民族例によると貝殻は貨幣として用いられることがあること、それに加えて自身の発掘経験から、貝層が基本的にはあまり土を含まずきれいであることなどを挙げ、貝層堆積は決して汚物の堆積ではなく、貴いものであると繰り返し主張している。これは恐らく貝塚をゴミ捨て場説以外で捉えた最初のものであろう。だがこの説はまだ直感的で根拠が薄弱であることから、根強いゴミ捨て場説の前には非力な一説にしかすぎなかったようである。

昭和40（1965）年になって、ジェラード・グロート氏の説と同様、貝塚をゴミ捨て場とは捉えずよりその精神性に迫ったものが出されている。西村正衛氏の「埋葬」がそれである。氏は縄文時代の埋葬形態一般を概説した後、埋葬と信仰について考察し、その結果として「貝塚からは人骨が出土し、貝塚は人骨を包含するとすなおにみとめたい」とした上で、貝塚を、貝類など全て生命を失ったものとともに死者を送る、アイヌのイオマンテのような一種の物送り的儀式が行われた結果ではないかとする考えを提示している[3)]。

この説に対して、その後いくつか議論が出されている。そのうち批判派の指摘している西村氏の論文の最大の弱点は、「縄文時代人の気持ちを推察して貝塚をかんがえれば」という曖昧な根拠に基づいていることであり（林　1977）、個別の事例を列挙してはあるものの考古学的な証拠が殆ど示されていない点にあるだろう。それでもゴミ捨て場説隆盛の中で、それに対する反抗とともに貝塚と埋葬との有機的な関係が積極的に主張されるようになったことは重要である。

一方、真正面から「貝塚とは何か」「貝塚はゴミ捨て場か」と問うたものもある。後藤和民氏の「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化について」(昭和48・1973年）である。氏は、〝大型貝塚干貝工場説〟を唱えて、貝塚は単なるゴミ捨て場ではない、という同様の主張を続けている。だが注意しなければならないのは、氏の場合は研究姿勢として初めから貝塚をゴミ捨て場とすべきではないと主張しているのであって、実際はやはり、日々のゴミでないにせよ、生産に伴うゴミであるということに帰結する。「貝塚とは何か」と改めて問うたところは評価されようが、貝塚遺跡の中で最も基本的存在である貝層堆積の意味自体にはその疑問は向けられておらず、その限りでは、やはりゴミ捨て場説の中に入ってしまうのではないかと思われる。

さて、西村氏の説の骨格を積極的に受け入れ、「貝塚」を「貝層」或いは「貝堆積」という表現に代えて発表したのは、前田潮氏である(昭和58・1983年）。前田氏は「貝堆積が平面的に被葬者の上部ないしその周囲の局限された範囲に、層位的には被葬者を直接おおう状態で堆積し」ている事例を幾つか紹介し、貝堆積が埋葬行為と切り離せない例があることを指摘した。氏は更に、貝殻が骨質を保存する事を縄文人は知っていた筈で、ミイラのように骨格が保存されることを願って、遺体を貝殻で覆ったのではと考えを進めている。それ以外考えられない、という事例を引いて主張している点は評価されるべきであるが、いささか一般性に欠ける感があり、それを一般化してみようとする具体的な方法論や展望も見られないようである。それが限界であるということだろうか。

これらを踏まえて、貝塚の性質や形状による分類とは本質的に異なる貝塚の分類が、関根孝夫氏によってなされている(昭和60・1985年）。氏は貝塚の精神性についての指摘も温存しながら、貝層の形成時における貝の堆積状況、貝塚の形成と遺跡・遺構との関連によって、貝塚をA～Cの３つに分類することを試みた。これによると、斜面貝塚や後藤氏が干貝工場説を唱えたような大型貝塚がA型貝塚、住居に堆積した貝塚のうち、住居廃絶と貝塚形成がほぼ時を同じくすると考えられるものがB型、同じくやや時間をおいていると考えられるものがC型とされる。氏はそれぞれについて、A型は「社会的規制のもとに集落の一隅に場を占めた」もの、C型は「信仰、祭儀的側面を強くも」ったもの、B型はその「中間型の様相を示」し「宗教的

側面をもつが、C型とは発現の契機を異にして」いるものとした。これらについては氏自身、「ここで設定した貝塚型は、大略であって、なお、今後分析検討されるべきものであろう」と述べている通り、例えば土坑や平地にスポット状に堆積した貝層などに言及していないなど、必ずしも充分な分類とは言えないが、貝塚の性格について、諸論から離れて冷静な観点に立って見ようとしているところに一つの評価が求められよう。

この、関根氏が「住居」としたところを、広く本来の機能を果たさなくなった遺構として捉え、「遺構内堆積貝塚」の意味を考察しようという上守秀明氏の研究もある(1986)。これは、県内の有吉北貝塚の人骨出土土壙の一事例について述べられたものであり、貝層中に墓標埋設の痕跡と考えられる柱状痕跡の土層がみられたことから、この貝塚は埋葬と有機的に関連し、葬送儀礼の一所産と捉えられるべきでは、と主張されているものである。今後の類例報告による展開が期待されるものであろう。

以上、貝塚と埋葬ということで、主に「貝塚から人骨が出土するということ」に言及或いは端を発するような研究を拾い上げて見てきたが、大森貝塚以来の、貝塚をゴミ捨て場と捉える見解があまりに根強く、人骨出土に関した注目すべき他の見解が生まれても単発で終わってしまってなかなか継続されない現実にあるようである。恐らく、貝塚が人為堆積であることを強調するために外国で言われた「台所のゴミ捨て場」説よりも、もっと実際に即した見地で「ゴミ捨て場ではない」説が、表面化しないものを含めて、考えられてきたと思われるが、それらがゴミ捨て場説を前に苦戦を強いられているのは、「ゴミ」という言葉自体の定義が曖昧で、しかも包括的だからなのではないだろうか。使えなくなったり、いらなくなったりしたものを全て「ゴミ」として包括できるのだから、極端に言えば、貝塚に限らず、遺跡に残されている遺構や遺物も、全て昔の人たちに放棄された「ゴミ」であるということにもなってしまう。

貝塚ではなるほど、例え埋葬人骨の上に堆積しているものでも、貝殻を初め土器片、獣骨など「生活廃棄物」とされるものが出土するため、「ゴミ捨て場ではない」ことを証明することは、基本的に不可能に近いと思われる。だが逆に、「ゴミ」の定義が曖昧である以上「ゴミ捨て場である」という説も、また不安定であると言わねばならない筈である。貝層イコール「ゴミ」説が強いのは、「ゴミ」の定義が不明瞭であるにせよ、貝層が「ゴミ」と考えられるような状況を呈しているとされるからであって、仮に貝層が埋葬に伴って堆積したものであると主張するためには、同様に「埋葬に伴う」と判断されるための状況を述べる必要があると思われる。西村正衛氏の論にはその状況が欠けており、前田潮氏の場合は貝層が直接人骨を覆っている例が幾つか挙げられているものの、それだけでは一般的に応用するには不十分であったと言えよう。

以下では、このような「状況」について注意を払い、貝塚における人骨出土事例をまず具体的に整理して見ていきたいと思う。

3．貝塚における人骨出土事例

貝塚における人骨の出土状況について、貝層との位置関係等まで詳しく報告してある例は、実はそれほど多くはない。まして文章だけでなく、平面図や断面図、写真といった視覚的な資料にまで示されているものとなると、殆ど皆無に等しくなってしまう。これは、人骨が出土してから記録が行われる、ということによるのだろう。ここではしかし、それでも敢えて記録された「特殊な」貝層のあり方や、出土状況における注目すべき所見等を拾い上げて、検討してみたいと思う。

それらは大きく分けて、少なくとも次の3つの事例に纏めることができる。

イ：間層を挟まず、貝層が直接人骨を覆う
ロ：平面的に貝層分布と人骨が重なる（間層を挟むと否とに関わらず）
ハ：人骨の周りに意図的なキサゴ（イボキサゴ）[4]層の堆積が見られる

イ事例が存在することは、既に前田潮氏も例を挙げて述べているところである。いずれにしても人骨が単に貝層下あるいは貝層中から出土したという事実に加えて述べられていたものであり、埋葬に伴う可能性を指摘し得るものである。以下、具体的に見ていくが、事例によってはこれらの事象が幾つか重合するものもある。また、集められた事例の絶対数が少ないこともあり、現段階ではこれは分類基準とするものではなく、単なる項目として扱うものであることを断っておきたい。

【イの事例】

○幸田貝塚38号住居跡出土人骨

住居の北壁に接して床面上から検出された。「埋葬遺体には貝が被覆され最上部には片口土器を直立した状態で埋置してあった。」（幸田貝塚発掘調査団 1975）と報告されている。この人骨は頭部から胸部にかけて火を受けており、周囲にはそうした痕跡もないことなどど合わせ、「きわめて特異な埋葬状態を示すもの」とされている。前期の伸展葬人骨としても注目されている例である。

○曽谷貝塚第Ⅳトレンチ出土人骨

3体の後期伸展葬人骨が発見され、「人骨の周囲は、ほとんど、破砕された貝殻で包まれていたが、明確な埋葬施設は見当たらなかった」（戸沢　1964）と報告されている。人骨が、土層ではなく、貝層で直接覆われていたことを示していると思われる。いずれも成人骨と見られる。

○上台遺跡A地点竪穴住居跡出土人骨

混土貝層中から、北東頭位の仰臥屈葬人骨1体と頭蓋骨が1体分発見された。いずれも明確な埋葬遺構は認められず「貝層を掘りくぼめて埋葬」（杉原・戸沢 1971）されていたと表現されている。人骨の直上を貝層が覆うものであると理解される。時期は、屈葬骨の方は浮島ⅠないしⅡ式期、頭蓋骨の方は興津式期ということで、いずれも例数少ない前期の人骨の出土例である。

○高根木戸貝塚第2号人骨

3号住居跡の「貝層をとりはらった床面上に（中略）現れた」「人骨をとりあげたあとを検討したところ墓壙らしく掘り込まれた遺構が確認された」（八幡ほか 1971）という所見について、堀越氏は「このことは、浅く掘り込んだ土壙に死者を入れたが、その上に厚く土を被せることはせず、あるいは意識的にか、貝殻で死体を覆ったという行為の復元を可能とする」（堀越 1986）と述べている。加曽利ＥⅠ式期、成人女性の屈葬人骨とされている。

○草刈貝塚'86報告511号址出土人骨

当貝塚では、合計47体にものぼる中期人骨が出土している。このうち、住居跡内で検出された甕被仰臥屈葬の人骨について、「この人骨の直上は純貝層で覆われ、深鉢内にツメタガイが多量に堆積してい」たと報告されている（千葉県文化財センター　1986）。そして更に、その周囲はキサゴで覆われていたという。これはハ事象も重なる例であるが、もしもこれらの貝層が人骨に伴うとすれば、貝種が選択された可能性を指摘することもできよう。加曽利ＥⅠ式期の熟年女性のものとされている。

【ロの事例】

○千駄堀寒風遺跡'33調査出土人骨

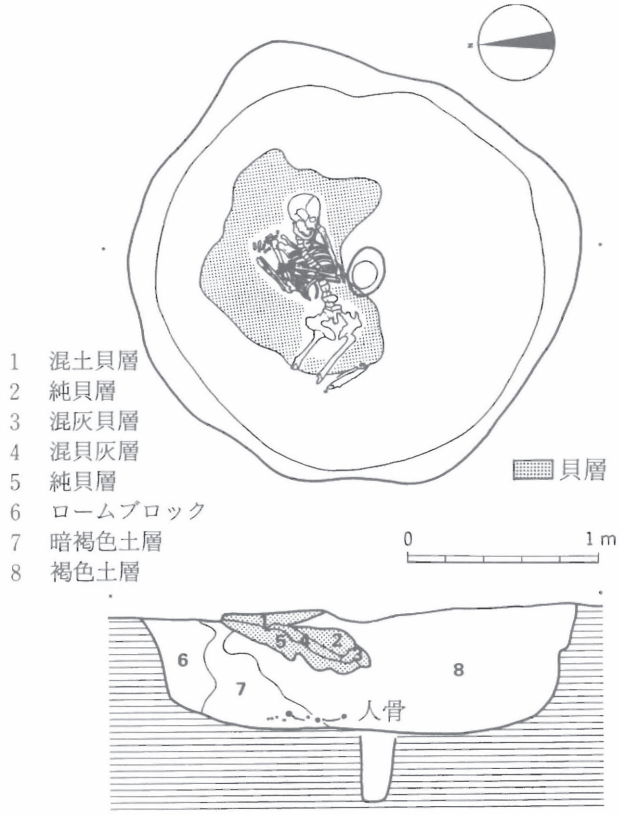
3体が近接して貝層下のローム層上から出土している。頭位は1体が西、残り2体が南である。この3体について報告書は「貝層はこれ等人骨の占むる地卽ち直徑約九尺の圓形？をなせる範囲のみに限られそれ以外近接しては存しなかつたとの事である。」（平野・滝口　1933）と述べている。これは、貝層が平面的に人骨の埋葬位置と一致していることを示していると解釈できよう。いずれも中期の仰臥伸展葬人骨、1体は熟年のものとされている。なお、これら三体には、炭と焼土も接して見られたという。

○加曽利北貝塚'62調査第1～3・5号人骨

古くから調査が行われ、全国でも最大規模を誇る加曽利貝塚では、人骨もかなり出土している。それらの殆どは、貝層下住居の床面か、それを掘りくぼめたピットから出土しているとされ、その一方で貝層を掘りくぼめ、貝層中に埋葬された例も見られるという。恐らく殆どにイ・ロ事象が見られるだけでなく、2m以上も堆積する貝層の中にキサゴの大規模貝層があることから、ハ事象とも重複する例が多いと考えられる。ここでは特にロの事例として興味を引く例を挙げる。即ち、4体が複雑に折り重なっており、「正常な埋葬状態とは言えない。（中略）何らかの事情で同時に横死したものと見なすことが合理的である」（宍倉　1975）とされているものである。これらは全体を混貝土層で覆われ、「人骨の埋葬された部分だけを貝殻で覆ったものか、貝殻で覆われた部分の人骨だけが残ったものかは判然としない」（同）という。他に、人骨検出とほぼ同じレベルから厚い灰層、焼土の堆積も見られたという。壮年・熟年男性が2体と熟年女性1体、少年1体で、いずれも加曽利ＢⅡ式期とされる。

○有吉北貝塚SK-774出土人骨（第1図）[5)]

遺構の床面よりやや浮いた位置で検出された人骨である。屈葬人骨と貝層との間に土層を挟むにも関わらず、その平面的な分布位置が見事に一致しており、しかも人骨の保存状態も比較的良く、とても興味深い例である。中期の壮年男性と考えられる。なお、貝層を構成する貝は、殆ど全て破砕キサゴである。



第１図　有吉北貝塚ＳＫ－774平面図・断面図

【ハの事例】

○廿五里貝塚出土人骨

中期の住居跡から加曽利ＥⅠ式期の深鉢を被って発見された熟年女性の屈葬人骨である。宍倉昭一郎氏は「下の住居址が半ば埋没し、その中に投棄された貝層堆積の中ほどに発見された。（中略）一旦、堆積した貝層を掘り込んで遺体を安置したという形跡は認められなかったが、その周囲にはキサゴが充満していた」（千葉市史編纂委員会　1974）と出土状況を述べ、堆積した貝層の「中央部が皿状にくぼんでいることをもって、墓壙と見て埋葬したことも考えられる」と考察するのと同時に、キサゴのあり方にも目をつけ、「遺骸周囲のキサゴの意義も考えねばならない」と注意を喚起している。堀越正行氏は「この所見は、土壙が存在しないこと、土の代わりにイボキサゴの貝殻で遺体を多い、更に貝殻投棄を続けていたと復元できる点で興味深いものがある」（堀越　1986）と述べている。これは、貝層が直接人骨を覆う例でもあり、イ事例とも重複している。なお、この人骨下から貝輪が発見されている。

○加曽利北貝塚第Ⅰ区第３号人骨

第Ⅰ調査区の36グリッド壁にかかって脚部のみ発見された人骨であり、埋葬形態、年齢、性別などは不明であるが「この人骨の下にはキサゴが敷きつめられており、その足許のキサゴ層下面には15センチほど掘りくぼめられたピットがある。その中に加曽利Ｅ式の土器が横倒しに押し潰された恰好で三個体分も発見された」（宍倉　1975）という。なお、この人骨は混貝土層中よりの発見とされている。

○同　第29号住居跡出土人骨群

勝坂式期の住居跡の床面、混貝土層下から出土した４体であり、この場で死亡し、その死亡姿態のままで同時に埋められたとする「異常な」埋葬例の、本貝塚においては４例目とされるものである。この住居跡内、そして周辺にはキサゴ及びローム塊が散在していたという。また、この住居跡の上の混土貝層の上面には、径約３ｍにわたって灰と焼土の広がりが確認されたという。熟年女性が２体、成人男性が１体、もう１体は子供と考えられている。

○加曽利南貝塚'64調査第14号人骨

この人骨には明確な墓壙は認められなかったが、「人骨の埋葬基盤床には厚さ５センチ前後の灰状に焼けた破砕キサゴ貝がその埋葬部分にのみ敷きつめられていた」（後藤　1968）。トレンチ壁面からの出土で、そのまま埋め戻されたため、詳細は不明とのことである。堀之内Ⅰ式期の人骨とされている。

○蕨立貝塚'66調査G" b (№30)竪穴[5]出土人骨

ローム層中に掘り込んだ小竪穴の下部には黒色土が半分ほど充満し、その上に加曽利ＥⅠ式の深鉢約３分の１ほどの土器片が敷かれ、その上に仰臥屈葬人骨が埋葬されていた。更に胸部から腹部にかけて２個体の深鉢が乗せられており、うち１個には細かく破砕したキサゴが満ちていたという。そして更にその遺構は「破砕されたキサゴをもって充満され」（蕨立貝塚発掘調査団　1966?）ていたと報告されている。上層には大型の深鉢の口頸部が倒立させて置かれてあったという。

○菱名貝塚出土人骨

№１号住居跡を20センチ程掘り込んだ土壙からの出土であり、その「周辺にはキサゴ・ハマグリ・シオフキなどの破砕された貝がまばらに混入した暗褐色土が囲繞して」（後藤・庄司　1969）おり「その周辺はローム質の黄褐色土層に変わっていた」という。本例はキサゴのみの例ではないが、一応ここに挙げておく。仰臥伸展葬であり、付近には犬も埋葬されていたという。

以上、貝塚の貝層下或いは貝層中から出土した人骨の「特殊な」あり方について、出土状況の報告に基づいて見てきた。人骨を覆っていた貝層に着目した事例を拾ってみると、少なくとも単なる偶然と片付けるのが不適当である例が、一つや二つではなく存在していることがわかる。これらについては、埋葬と深い関連を持つと見て間違いないであろう。残念ながら、今のところ「一部の例」というほかない状況だが、人骨の出土をある程度予想し、貝層堆積のあり方にもっと注意をを向けるような調査・記録がなされることで、数が増すものと思われる。

ともあれここは、埋葬と関連する貝層堆積が少なからず存在するということでとりあえず留め置き、以下では、これらの事象の中で特に目立ったキサゴのあり方を中心に、貝塚と埋葬との関連について全体的な視点から考えてみたい。

4．キサゴ貝層の特殊性

埋葬と特に関わりを持つらしいキサゴ貝層とは、当地域の貝塚全体において、どのような位置を占めるものなのだろうか。

キサゴ貝層[7]は、当地域においては縄文時代前期から出現が認められるものである。それ以前の貝塚で主体をなしていたハイガイやマガキに代わって、突如主体を占めるようになり、中期以降の貝塚、特に大型貝塚では、キサゴを大量に見るようになる。後期に至っても依然キサゴ主体に、中期と大差ない性格をもつ貝塚が形成されるが、これをピークに安行式期になると、大型のハマグリの検出例が増え、キサゴは出土量が激減する。このようなキサゴ層のあり方は、他の貝種の層に比べ非常に特殊であると言え、金子浩昌氏によれば、「これほどのイボキサゴ層の発達が、同じ東京湾岸でも西岸域ではみられず、また奥東京湾、現利根川谷においてみられないとすれば、このイボキサゴが東岸域を特徴付け、また大規模の貝塚の出来る要因となったといってよいであろう」（金子　1983）という程である。

当地域における貝塚遺跡数の変遷は、第２図[8]に示したとおりだが、中・後期に爆発的に増える貝塚、特に大型の馬蹄形貝塚の多くにキサゴ貝層が見られるということである。当地域における貝塚の消長とキサゴの存在はこのように、大きく関わると言ってよい。

キサゴという貝は、内湾の湾口から湾中央部の潮通しの良い潮間帯の砂質～泥質砂底に棲息する。干潟に大群をなすことがあり、１㎡当たり300～2,000個体という高密度で、数百万～数億個以上に及ぶ個体が一つの集団を形成しているという。径15㎜足らずの小さな巻き貝であり、一個ずつの肉量はわずか２ｇ程度である（金子　1983）というから、食用にするなら大量に採るということに必然性はあろう。また、大量に採れるという好条件もある。しかしながら、同じ東京湾岸域でも東岸と西岸とで貝塚の貝種のあり方が異なるという事実は興味深く、このことは、貝塚が単に食嗜や当時の自然環境を忠実に反映しているということばかりでなく、貝塚を形成するという行為自体に、何らかの目的的な文化的意味合いが含まれていた可能性を示すものであると言えるのではないだろうか。

貝殻が大量に堆積して貝塚として残るということは、決して単なる偶然の現象ではなく、そのための条件的状況として次のようなことが考えられる。即ち第１の条件として、貝が沢山採集されなければならないということ。貝殻を大量に堆積させるためには、それだけの量の貝を、時間的な幅は考えないとしても、持っていなければならない。第２に、その大量の貝（貝殻）を、遺跡（集落など）に持ち込まなければならないということ。海辺や川辺で貝を採ってそこで殻を捨ててしまうのではなく、少なくとも現在その貝層が存在しているその場所まで運ばれなくてはならない。そして第３に、「そこに堆積すること」という認識をもって、その場所に貝（貝殻）を集積させなければならないということである。広い遺跡の中に分散して投棄されたのでは、いくら大量に貝（貝殻）を所有しても残らない確率が高くなってしまうからである。縄文時代の貝塚が遺存しているのは、このように単なる偶然だけでなく、当時の人々の意識的な行為によるところが大きいと言えるだろう。とすると、このこととキサゴとの関わりとを考える時、何らかの目的を持って貝塚が形成され、当地域では、その目的に最も適う、キサゴという貝を得るに至って、「貝塚文化」が花開いたと考えることができるかもしれない。

当地域の貝塚を特徴付けるとも言えるキサゴ貝層は、それだけでも充分特殊と言えるようなあり方をしていると言えるが、実は個々の遺跡の貝層の中でも、他の貝種の層と比べ、絶対量が多いということを前提として、次の二つの特殊性が認められている[9]。

一つは、殆どそれのみの層をつくるということである。同じ砂底棲貝種であるハマグリやシオフキ、アサリも多量に存在し、それを主体とする貝層をつくるこ

とがあるが、例えばハマグリのみという貝層はあまりなく、必ずシオフキやアサリ、キサゴ等が混じっていると言ってよい。それに対してキサゴは、キサゴのみの層をしばしばつくっている。それも、単に他の貝種を含まないというだけでなく、土器などの人工的な遺物も殆ど含まないということであり、これは非常に特徴的である。

また、もう一つは、第1の特徴とも関連するが、それのみが破砕された状態での層をつくるということである。破砕貝はハマグリなどの二枚貝についてもみられるが、キサゴは他に比べ破砕されていることも多く、それだけで「破砕キサゴ層」という層をつくる。

このようなキサゴ層の特徴は、大きな貝塚の大貝層でも、個々の遺構内に堆積する小貝層のレベルでも共通して言える傾向である。

さてここで個別の埋葬事例に戻ってみると、前章で検討した際、埋葬にキサゴが深く関わるかもしれないということが指摘できた。キサゴが人骨周辺に人為的に並べられたり、土器に納められたりしている例があるのははもちろん、人骨を覆う貝層にもキサゴ層がよく見られた。

だが、実は特にキサゴが埋葬行為に関係するのではないかという指摘は、ここで初めてなされるものではない。前章の廿五里貝塚事例中で紹介した宍倉昭一郎氏の「遺骸周囲のキサゴの意義も考えねばならない」（千葉市史編纂委員会　1974）という指摘もそうであるが、鈴木正博氏も中峠貝塚の家犬埋葬遺構の検討から、キサゴ層の特殊性を詳細に考察し、「中峠貝塚では、家犬骨埋葬儀礼にキサゴの貝層が特徴的であった。実は僕にとってキサゴが埋葬に利用される事象は今回が初めてではなく、千葉市二十五寺南貝塚[10]の加曽利E式の埋葬人骨調査で既に経験して居った」（鈴木1989）と、キサゴと埋葬との関わりを、所感としてではあるが述べている。更に氏は、なぜキサゴが選ばれて採集されたのかということについて「即ち、キサゴの利用面の一つに小澤智生氏は『光沢があり、色彩の変異に富む美しい貝殻は、玩具・貝殻細工の材料として利用される』点を紹介しており、（中略）より光沢があり、より美しいキサゴを直接採集したのではないかと思う。」（同）と考えを進めている。

例えキサゴが埋葬に関わるとしても、それが利用される理由については敢えて議論するまでもないという意見もあるだろうが、ハマグリやシオフキ、アサリといった貝よりも選ばれ、「貝塚文化」を特徴付けるとされるほどのキサゴの意義を、ただ「美しいから」とか「沢山採れるから」、或いは「ノーコメント」で済ましてしまってよいものだろうか。それではキサゴの持つもう一つの特徴、破砕されるということの意味も考える必要はないのだろうか。

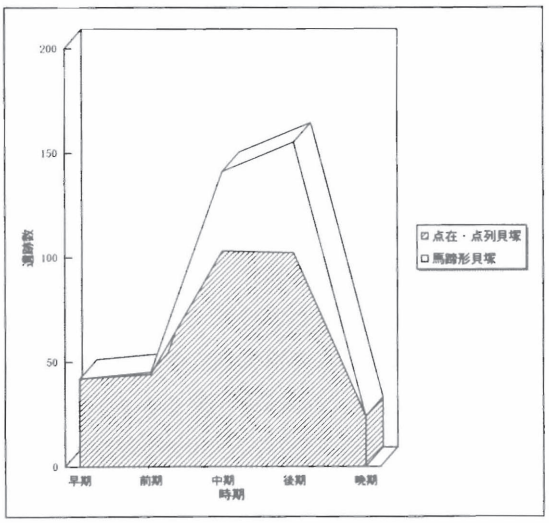
破砕貝層はキサゴ層に特徴的であるが、一方これを意識しているかのような他の貝の破砕層も見られなくはない。貝が人工的に破砕されるということは、貝層が単なるゴミの集積と考えない場合、そうすることで貝の持つ意義をより増大させようとしたものであると考えられる。わざわざ手間をかけて破砕することによって、その意義の強化を願ったものと考えられるのである。

この考えに対して、一つの示唆を与える記載がある。人間や犬などの埋葬骨は発見されていないが、中薙遺跡の竪穴住居址001の6つの貝ブロックを含む覆土についての記載である。「貝種は、イボキサゴ97%、アサリ1.7%、残りその他となる。全て破砕されていて、貝のカルシウム分が多量に流出しているのが特徴である」（千葉県文化財センター　1986）という。この記載は、貝層は、破砕されることによってより多くカルシウム分を出すということを意味しているのではないか。もちろんこの記載だけを根拠とすることはできないが、貝殻は砕かれることでよりカルシウム分を出すということは、私たちは経験的にも知っていることであり、例えば今日でも、土壌改良のために破砕貝が肥料としてまかれたりする。

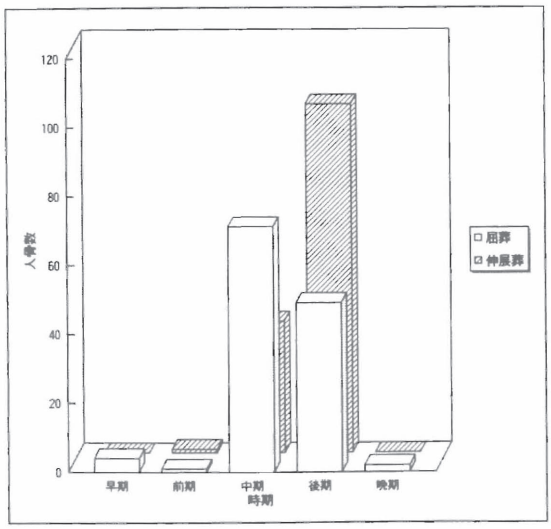
貝がカルシウム分を出すということ、破砕されるとより有効であるということ、そしてカルシウム分は骨質を保存するということ、これらの事実を縄文人が知っていて埋葬に利用していたとするなら、かつて前田潮氏が考えたように、彼らは意識的に遺体の骨質を残そうとして、遺体に貝をかけて埋葬したということになるのではないだろうか。そしてそれは、キサゴが好まれて利用されたことを更に結びつけて推論するなら、例えばキサゴはただ美しいばかりでなく、他の貝に比べて、破砕すればなお良いものの、破砕しなくてもその小ささ故か骨質保存により有効であって、そのためそれで遺体を覆おうとしたとも考えられる。初めは試行錯誤であったが、貝の中でもキサゴが最も目的に適っていることを知り、更に採集もしやすく、美しくもあることから、ハマグリなどでも代用は可能なものの、キサゴの採集量が爆発的に増加した。キサゴは必ずしも食用とは限らず、埋葬のために採られたことも少な

遺跡番号	遺跡名	市町村	時期 早期	前期	中期	後期	晩期	不明
1	殿平賀貝塚	松戸市				4		
2	幸田貝塚	松戸市		1				
3	東平賀遺跡	松戸市			3			
4	千駄堀寒風貝塚	松戸市			2			
5	貝の花貝塚	松戸市			3	40		8
6	中峠貝塚	松戸市			16			
7	子和清水貝塚	松戸市			5			
8	向台遺跡	市川市			14			
9	曽谷貝塚	市川市				24		5
10	下貝塚	市川市				1		
11	姥山貝塚	市川市			19	39		
12	今島田遺跡	市川市			2			
13	北台(上台)遺跡	市川市		2				
14	堀之内貝塚	市川市				2		10
15	権現原貝塚	市川市				28		
16	中沢貝塚	鎌ヶ谷市				2		2
17	根郷貝塚	鎌ヶ谷市			8			
18	古作貝塚	船橋市				43		3
19	宮本台貝塚	船橋市				32		
20	海老ヶ作貝塚	船橋市			3			
21	高根木戸貝塚	船橋市			8			
22	谷津台貝塚	千葉市		1				
23	園生貝塚	千葉市				5		
24	木戸作貝塚	千葉市					1	
25	廿五里貝塚	千葉市			1			
26	荒屋敷貝塚	千葉市			4			
27	向の台貝塚	千葉市	4					
28	矢作貝塚	千葉市				12		
29	加曽利貝塚	千葉市			14	36	4	2
30	蕨立貝塚	千葉市			9			
31	さら坊貝塚	千葉市			1			
32	台貝塚	千葉市				1		
33	菱名貝塚	千葉市			1			
34	有吉北貝塚	千葉市			14			
35	小金沢貝塚	千葉市				4		
36	築地台貝塚	千葉市				1		1
37	長谷部貝塚	千葉市			1			5
38	誉田高田貝塚	千葉市				59		
39	武士遺跡	市原市			2	5		
40	実信貝塚	市原市						2
41	草刈遺跡	市原市			47			
42	祇園原貝塚	市原市				24		8
43	西広貝塚	市原市				32	6	19
44	山田橋亥の海道貝塚	市原市				1		
45	祇園貝塚	木更津市				9		
	合計		4	4	177	404	11	65

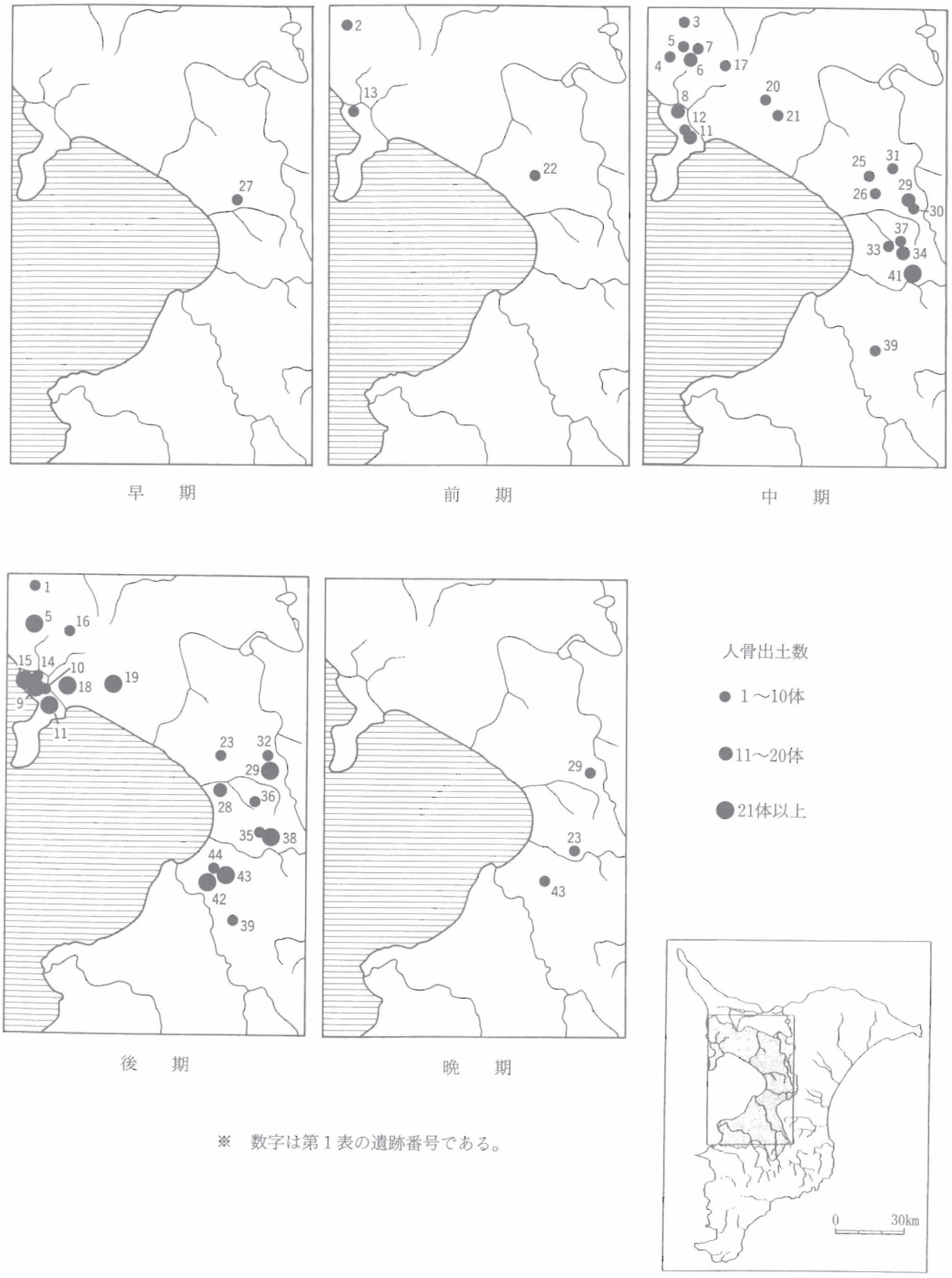
第1表　時期別出土人骨数



第2図　貝塚遺跡数



第3図　屈葬・伸展葬人骨数



※　数字は第1表の遺跡番号である。

第4図　人骨出土貝塚の時期別分布

からずあったかもしれない。中・後期にはそれが最高潮に達し、埋葬用ということで神秘的な意味がより増したキサゴを大量に集中して堆積させる。大型貝塚は、特別な場として、いわば一大宗教センターとして埋葬も盛んに行われるようになる。そしてやがては乱獲によるものか、キサゴ量も少なくなり、これに時代の流れも相乗し、「貝塚文化」が廃れていった、荒唐無稽の謗りをも承知で言えば、このような流れが成り立ちうると思われるのである。

キサゴ貝層の特殊性は、このように想像の域を出ない部分もあるものの、埋葬と結びつけて解釈することができるのではないだろうか。そしてそれはキサゴが当地域の「主役」である以上、少なくとも当地域における貝塚一般としても応用可能な筈である。

貝層が単なるゴミの集積ではなく広く「埋葬」一般に関わるとする考えは、まだ大きな意義を秘めている。

5．「貝塚文化」と埋葬

貝塚が埋葬と関わりを持つ。もしそうであるとすれば、貝塚の消長と、埋葬人骨数との間に何か関係が認められる筈である。そこで、当地域において人骨が検出された貝塚遺跡と、その検出数を纏めてみたのが、第1表[11]である。そして更にこれを図化したのが、第4図である。これらと第2図とを見比べてみると、貝塚遺跡数が急激に増える中期には、人骨検出遺跡が急激に増え、貝塚の大型化が目立つ後期には、人骨が多く検出される遺跡が目立っている。これは、個々に見ると調査歴の有り無しや発掘面積等にも関わってくるのだろうが、全体の傾向としては、両者に相関関係があると見て良いのではないだろうか。大型の馬蹄形貝塚では、掘れば人骨が沢山検出され、点在貝塚ではそれなりの数であるということ、これは偶然であるのか。それほど貝層堆積と埋葬の位置は、偶然に一致しているものなのだろうか。

更に考えてみよう。貝層がなければ、遺体は腐る。もし遺体の骨質を保存するために縄文人は遺体の周りに貝を堆積させたのだとしたら、どのように堆積させるのがより有効であるのだろうか。

まず考えるべきは、人骨と貝層との間に間層を挟むか否かである。直感的には間層を挟まない方が有効と思われるが、実際には、必ずしも直接覆われたものの方が残りが良いというわけでもなく、間層をはさんでいても残りの良い例はある。これは、その間層に貝層のカルシウム分が充分に浸透したためと考えられ、土がアルカリ化する程の貝がかかっていれば、人骨は保存されることを示している。

それでは、貝の量が骨質の保存を規定していると言えるのだろうか。これについては、どちらかといえば貝層の厚さの方が重要である可能性がある。しかしある程度は規定していると言えよう。貝層の削平が想定される例でも、基本的に貝量が少なかったと考えられるものは骨の残りが悪く、多かったと考えられるものは良い傾向にあるからだ。

しかし、全く的外れなところに貝が堆積していても、人骨は保存されない。問題は、貝層が人骨の位置するところにきちんとあるかどうかであって、これがもっとも人骨の保存を規定する条件であると言えよう。即ち、人骨の埋葬位置を貝層が覆っているということを前提として初めて、間層を挟むか否か、貝量はどのくらいか、貝種は、破砕の状態は、といった事柄が有機的に人骨に関わってくると考えられるのである。

これは今更言うまでもないことのようであるが、ここでわざわざ述べたのは、人骨保存のために貝をかけたと考える場合、貝層の平面的な分布範囲がその下の埋葬人骨の姿勢に規定される筈だと考えられるからである。遺体が手足を縮めてこじんまりと埋葬されている場合は、上にかかる貝層の表面積は小さくて済み、手足を伸ばして埋葬されていれば、全身を保存しようとする場合、それよりも表面積は大きくなくてはならない。例えば貝量に限りがあるとするならば、なるべく体を小さく縮めて、より狭く厚く貝層を堆積させることによって保存を考えた筈である。即ち、屈葬・伸展葬という埋葬姿勢に、貝層のあり方も関係してくると考えられる。

屈葬は、確認されている限りでは、縄文時代早期から全時期通して見られ、一般的に膝を折り曲げた状態で埋葬されているものを言う。研究史においてもかなり早くから注目されている。

縄文時代の屈葬の理由について最初に考察したのは長谷部言人氏であった。氏によると「一、墓穴の節約・二、平生の坐位或は安臥の態を採らしむ・三、胎兒の姿勢を採らしむ・四、封禁を施して死者の再歸迷奔を遮ぐ」（長谷部　1925）の四つが理由として考えられているが、これは今日でも殆ど変わらないと言える。また、屈葬と一口に言っても、定型的な姿勢と言えるものもなく、屈し具合にも強弱があったり、下半身をよじっていたり股をひろげたりしているものもある。更に体の向きも、仰臥・側臥・伏臥とあるほか、座位

も存在し、恐らく人骨にしか注意を向けない限りは、長谷部氏以上の理由は考えられないと思われる。

一方伸展葬は、前期前半に既に幸田貝塚に例が見られるものの、中期頃から増えてくる埋葬法である。これにも仰臥・側臥・伏臥が見られ、屈葬と併存するが、その意味は不明とされている。

屈葬と伸展葬が先に考えたように、貝の量に関係があるとすれば、貝層の表面積や量自体の多い大型貝塚では伸展葬が多く、各遺構内の貝層を中心とする点在貝塚では屈葬が多いということが示されなくてはならないだろう。ここでは、それについて各々の例で検証することはせず、東京湾東岸域で出土した人骨のうち、時期と葬位とが確認できるものを拾い上げ、時期別に数えて全体として見てみた。第3図がそれである。確認できた例がそれほど多くないため、絶対的な資料とは言えないが、第3図を見てみると、貝塚が大型化する傾向にある後期に、伸展葬の割合が増えていることがわかる。貝塚が数も規模も小さく、出土人骨も少ない早・前期は、確認できたものはほんの数体であるが、殆ど屈葬である。これが、貝塚が急激に増え、規模も大きくなる中期になると、屈葬の方が多いものの、伸展葬という葬法も出現と同時にかなり見られるようになり、更に後期、「貝塚文化」の絶頂期に至っては、多くの人骨が発見される中で伸展葬の割合が屈葬を凌いでかなり高くなっているのである。そして晩期は、貝塚自体も少なく、葬法も不明のものが多い。わずかに確認できたものも、全て屈葬である。

このような伸展葬の数の増減のあり方は、貝塚の変遷、キサゴ量の変遷、そして先に見た埋葬人骨の検出数の変遷と、同じ経過を辿っているとは言えないだろうか。大まかに6期区分でしか流れを辿ってこなかったものの、そのいずれもが、互いに相関しているとは言えないだろうか。即ち、貝塚の規模はキサゴの量に対応し、キサゴを初めとする貝の量の変化に応じて、保存される人骨の数、中でも伸展葬の数が変化する、これは単なる偶然や発掘面積等の問題では片づけられない、貝塚の本質を表すものなのかもしれない。

具体的、そして全体的に貝塚と埋葬との関連を考察してきたが、以上のように見てくると、「貝塚文化」という表現はこの地域の貝塚について、生産・消費といった生活的な面を強調して捉えようとするときよりも、むしろ埋葬・儀礼という精神的な面を強調して捉えようとしたときにその意義を充分発揮するものであるように思われる。即ち「貝塚文化」は、縄文人の、からだが永遠に保存されることへの願いが生んだ一種の宗教文化であり、その文化が絢爛と華ひらく中期、円熟する後期には、大規模な宗教センターとして発展した大型貝塚も形成され、晩期に至って様々な状況の変化の波をかぶり、衰退していったものである…、このような考えは暴論であろうか。

「貝塚文化」の意義については、上のように埋葬を中心とする宗教文化であると捉えることができるかもしれないが、その場合、一つ誤解してはならないことがある。それは、貝塚から出土した人骨が、縄文人の全てではないということである。貝塚から出土する人骨はいわば氷山の一角であって、他に埋葬されて残らなかった人がもっと大勢いた筈であることは今や常識化しており、改めて確認するまでもないかもしれない。しかし、貝をかけられた人は骨が残り、かけられない人は残らない。骨の残る、残らないはこの場合、重大な問題の筈である。とすれば、縄文時代は一般に、装身具の着装例や埋葬法の比較などから階級差などがないと考えられているが、少なくとも貝をかけられた人－「貝葬」とも言うべき方法で葬られた人－と、かけられなかった人との間に、何らかの「差」があったと考えることができる。「差」という言葉は不適切かもしれないが、例えば身分や階級、職業、出自などの、社会的な違いあるいはまとまりの存在が想定できることになる。

これはもちろん、この地域だけに限らず、他の諸研究とも合わせ考えていかねばならない問題であろう。しかし、「貝塚はゴミ捨て場ではない」「人骨が貝塚から出土するのは偶然ではない」という命題は、少なくともそれだけで大きな可能性を秘めていると言えよう。

6．おわりに

人骨収集という偏ったテーマから火のついてしまった日本の貝塚研究は現在、貝塚の貝の総カロリー計算や採集季節推定、動物遺存体分析などの自然科学的研究が盛況となり、同時にそれらが単独で、貝塚研究としてバラバラに遠のいていくような感さえ与えているような気がする。鈴木正博氏が「貝塚形成統合機構」なるものを主張し、貝層の形成過程を復元する場合、「形成機構」（貝層に反映されている表層的なもの）と「統合機構」（形成機構の組み合わせの中に反映される深層的な構造）の2つを考え合わせる必要があると説いた（鈴木　1989）のは、もちろん氏の主張する

とおり「『不要物の廃棄』という認識を有する限り、貝塚を保存する学問的基盤を見い出せず、貝塚破壊へと傾斜して行くであろう。」（同）という危惧を示すものであることは言うまでもないが、分野別細分化研究にはまりがちな貝塚の調査・研究に対する警鐘の意味にもとれるだろう。今、縄文時代の多くの情報を内包する「貝塚」が、人為的な堆積によって形成されているという基本にもう一度立ちかえって、人骨を含め、何がどう出土しているのか、貝塚とは本当にゴミ捨て場なのかを見つめ直してみる必要があるのではないだろうか。貝層という小さな単位から貝塚という大きな単位へ、考古学的に、個別的且つ総合的に貝塚を捉えていく調査・研究が必要とされているのではないだろうか。そうでなければ、例えそれで縄文社会の復元を試みてみても、それは本質を欠いた形骸でしかあり得なくなってしまうかもしれない。

最後になるが、これは國學院大學小林達雄教授・永峯光一教授らの御指導のもと、國學院大學に提出した卒業論文を、拙いながら纏め直したものである。今に至っても実際の貝塚の現場を見た経験が浅薄であるため、ともすれば机上の空論ともなりかねないものであろうが、これについて経験豊かな諸先輩方の御意見を頂けるなら幸いである。

なお、未発表資料を快く提供して下さった関係の方々には、改めて感謝したい。

註

1）杉原荘介・戸沢充則両氏は、「貝塚はそれ自身、石器時代人のゴミ捨場にすぎないが」とした上で、関東南部の、縄文貝塚が集中するあり方について「貝塚文化」という言葉を用いて表現している。その意味するものは、「海の幸を媒介として、広大な関東南部の土地を、生活の領域として積極的に開拓した人々によって、生み出された文化」（杉原・戸沢　1971）としている。意味付けについては後に考察を加えるが、この言葉自体は有用と思われるので、小論でも用いることとする。

2）ここで言う「東京湾東岸域」とは、特に貝塚が集中していて性格の見やすい、内湾部とする。即ち便宜上、次の12市とする。松戸市・鎌ヶ谷市・市川市・船橋市・習志野市・八千代市・佐倉市・四街道市・千葉市・市原市・袖ヶ浦市・木更津市（いずれも県内）。

3）この考えについては、西村氏は、孫引きではあるものの、河野広道氏の見解（河野　1935）を参考にしているようである。

4）キサゴとイボキサゴは、生物学的には異なる種であるが、考古学の報告等ではしばしば混同が見られる。「キサゴ」と表記されているものは、ほぼ全てイボキサゴを指すとみて良いと思われる。小論でも、必ずしも適当ではないかもしれないが、「キサゴ」と表記して統一した。

5）有吉北貝塚の資料は、本稿を執筆段階で未発表のものである。整理担当者に承諾を得た上で、使用させて頂いた。

6）この遺構は、『千葉市坂月町蕨立貝塚発掘調査報告書』(1966?)では「G″bピット」と報告されているが、『千葉市史　第1巻』(1974)では「№30竪穴」と表現されている。

7）以下の内容は主に、千葉県文化財保護協会　1983による。

8）第2図は、千葉県文化財保護協会　1983　83頁の「千葉県下貝塚遺跡の時期的変遷（市町村別）」表をもとに、若干の修正を加えて作成したものである。

9）金子　1983　による。

10）前章の事例で紹介した「廿五里貝塚」の事例にあたる。

11）この集計では、確実に出土事実が確認できたもののうち、6期区分による時期決定がほぼ可能なもののみを数えている（有吉北貝塚・武士遺跡のデータは本稿執筆段階で未発表である）。従って、古い発掘で人骨出土事実のみしか伝えられていないものや、散乱した部分人骨などで1体として数えられないものは含まれていない。また、多人数合葬の例で、人骨数が確定しないものは、その最低人数で数えた。

主な引用・参考文献

麻生優　「千葉県市川市堀之内貝塚」『日本考古学年報』7(1957)

市川市教育委員会　『史跡曽谷貝塚保存管理計画書』(1986)

㈶市原市文化財センター　『千葉県市原市草刈遺跡』(1985)

㈶市原市文化財センター　『市原市亥の海道貝塚』(1992)

市立市川考古博物館　『上台貝塚』(1988)

市立市川考古博物館　『堀之内貝塚史料図譜』(1992)

江坂輝弥　「日本の貝塚研究史」『考古学ジャーナル』№231(1984)

海老ヶ作貝塚第二次発掘調査団　『海老ヶ作貝塚－第二次発掘調査概報－』(1975)

江森正義　「松戸市中峠遺跡出土の人骨（1～3）」『かみしき』29～31(1987～89)

大串菊太郎　「津雲貝塚及國府石器時代遺跡に対する對す

る二三の私見」『民族と歴史』3－4(1920)
岡本東三編　『城ノ台南貝塚発掘調査報告書』千葉大学文学部考古学研究室(1994)
上総国分寺台遺跡調査団　『西広貝塚』(1977)
金子浩昌　「千葉県における貝塚遺跡の分布とその性格」『千葉県の貝塚』千葉県文化財保護協会(1983)
鎌ヶ谷市教育委員会　『平成元年度鎌ヶ谷市内遺跡群発掘調査概報』(1990)
鎌ヶ谷市史編さん委員会　『鎌ヶ谷市史　上巻』(1982)
鎌ヶ谷町　「中沢貝塚」『鎌ヶ谷町史・資料集2』(1965)
神尾明生　「千葉県園生貝塚1954トレンチ」『日本考古学協会研究発表要旨』(1954)
上守秀明　「遺構内堆積貝塚のもつ意味について－有吉北貝塚の一事例の場合－」『研究連絡誌』15・16号(1986)
久保常晴　「千葉県千葉郡築地台貝塚」『日本考古学年報』2(1954)
熊野正也　「今島田遺跡」『市川市文化財調査報告第1集』(1969)
幸田貝塚発掘調査団　『幸田貝塚の調査(4)　昭和49年度発掘調査概要』松戸市教育委員会(1975)
河野広道　「貝塚人骨の謎とアイヌのイオマンテ」『北方文化論』河野広道著作刊行会編(1935)
小金井良精　「下総国国分村堀之内貝塚所出の人骨に就て」『東京人類学会雑誌』20-224(1904)
小金井良精　「日本石器時代人の埋葬状態」『人類学雑誌』38-1(1923)
後藤和民　「加曽利南貝塚人の埋葬」『貝塚博物館調査資料集　第2集　加曽利貝塚II』日本考古学協会・加曽利貝塚調査団編(1968)
後藤和民　「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化について」『房総地方史の研究』雄山閣(1973)
後藤和民　「馬蹄形貝塚の再吟味－東京湾東沿岸における縄文集落の一様相について－」『論集　日本原史』吉川弘文館(1985)
後藤和民・庄司克　「昭和47年度加曽利南貝塚南側平坦部第4次遺跡限界確認調査概報」『貝塚博物館紀要』第7号(1981)
子和清水貝塚発掘調査団　『子和清水貝塚1973』(1973)
子和清水貝塚発掘調査団　『松戸市文化財調査報告第7集子和清水貝塚』(1976)
近藤義郎・佐原真訳、E・S・モース著　『大森貝塚』岩波文庫(1983)
ジェラード・グロート　「貝塚は捨處であるか」『民族文化』2-11(1941)
宍倉昭一郎　「廿五里南遺跡」『日本考古学年報』24(1973)
宍倉昭一郎　「人骨の出土状態」『貝塚博物館調査資料第1集　加曽利貝塚Ⅰ』加曽利貝塚博物館編(1975)
清水潤三　「千葉県市川市堀之内貝塚」『日本考古学年報』(1957)
杉原荘介・工楽善通　「千葉県市川市曽谷貝塚」『日本考古学年報』15(1967)
杉原荘介・戸沢充則　「貝塚文化―縄文時代―」『市川市史　第1巻』(1971)
鈴木尚ほか　「堀之内貝塚人骨」『人類学雑誌』65-5(1957)
鈴木正博　「縦横貝塚論（貝塚実態論）への接近的理解のための千葉県松戸市中峠遺蹟第10次調査地点第　2貝ブロックの調査覚書－先史学と考古学の共闘を目指して－」『下総考古学』11(1989)
関根孝夫　「貝塚覚書」『日本史の黎明　八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』六興出版(1985)
芹沢長介ほか　「堀之内貝塚エ・ミ・キ・モ・サ地点発掘報告」『人類学雑誌』65-5(1957)
曽谷貝塚発掘調査団編　『曽谷貝塚E地点発掘調査概報』(1978)
高橋唯峰　「下総国堀の内貝塚の人骨」『考古界』8-6(1909)
高橋良治・塚田光・小片保　「千葉県子和清水貝塚発掘調査概報」『考古学雑誌』49-2(1963)
高柳圭一　「千葉県実信貝塚」『季刊考古学』41号(1992)
滝口宏編　『祇園原貝塚III　上総国分寺台発掘調査概要XⅠ』(1983)
武田宗久　「下総国矢作貝塚発掘報告」『考古学』9-8(1938)
㈶千葉県文化財センター　『千葉県荒屋敷貝塚』(1978)
㈶千葉県文化財センター　『築地台貝塚・平山古墳』(1978)
㈶千葉県文化財センター　『千葉東南部ニュータウン7　木戸作遺跡（第2次）』(1979)
㈶千葉県文化財センター　『矢作貝塚』(1981)
㈶千葉県文化財センター　『千葉東南部ニュータウン10』(1982)
㈶千葉県文化財センター　『千葉市中薙遺跡』(1986)
㈶千葉県文化財センター　『千原台ニュータウンIII　草刈遺跡（B区）』(1986)
㈶千葉県文化財センター　『房総考古学ライブラリー3　縄文時代2』(1987)
㈶千葉県文化財センター　『市原市草刈貝塚』(1990)
㈶千葉県文化財センター　『千葉市誉田高田貝塚確認調査報告書』(1991)
千葉県文化財保護協会　『千葉県の貝塚』(1983)
千葉市加曽利貝塚博物館　『加曽利貝塚Ⅰ～Ⅳ』(1967・

68・70・71)
千葉市誌編纂委員会編　『千葉市誌』(1953)
千葉市史編纂委員会編　『千葉市史　第1巻』(1974)
千葉市史編纂委員会編　『千葉市史　史料編1』ぎょうせい(1976)
戸沢充則　「千葉県市川市曽谷貝塚」『日本考古学年報』12(1964)
戸沢充則　「千葉県市川市向台遺跡」『日本考古学年報』20(1972)
戸沢充則　「千葉県市川市権現原遺跡」『日本考古学年報』20(1972)
戸沢充則編　『縄文人と貝塚』六興出版(1989)
都立江北高等学校郷土研究室　『千葉県紙敷貝塚発掘調査報告書』1輯(1951)
西野元　「松戸市千駄堀寒風遺跡」『史潮』84・85合併号(1963)
西村正衛　「千葉県市川市堀之内貝塚」『日本考古学年報』7(1957)
西村正衛　「市川市国分旧東練兵場貝塚」『早稲田大学学術研究』10(1961)
西村正衛　「埋葬」『日本の考古学II　縄文時代』河出書房(1965)
長谷部言人　「尊葬の起源に就て」『考古学雑誌』15-5(1925)
林謙作　「縄文期の葬制第I部　研究史」『考古学雑誌』62-4(1977)
平野元三郎・滝口宏　「下総高木村寒風発見の人骨」『ドルメン』2-7(1933)
平野元三郎ほか　「祇園貝塚発掘調査概報」『千葉県文化財調査抄報第4集』(1970)
船橋市遺跡調査会　『古作貝塚II－縄文時代後期貝塚の調査－』(1982)
船橋市遺跡調査会　『古作貝塚－遺跡確認調査報告－』(1985)
船橋市教育委員会　『宮本台一縄文時代後期の貝塚および集落址の調査I・II』(1974)
堀越正行　「馬蹄形貝塚研究序論」『史館』4号(1974)
堀越正行　「千葉県姥山貝塚」『探訪縄文の遺跡　東日本編』(1985)
堀越正行　「京葉における縄文中期埋葬の検討」『史館』9号(1986)
前田潮　「貝塚にみる縄文人の精神生活」『歴史公論』№94(1983)
松戸市教育委員会　『松戸市貝の花貝塚調査概報1965年』(1966)
松戸市教育委員会　『松戸市文化財調査報告4集　貝の花遺跡』(1973)
松戸市教育委員会　『子和清水貝塚　1974』(1974)
松戸市教育委員会　『坂之台・東平賀遺跡第3次調査』(1983)
松戸市教育委員会　「幸田貝塚（第11次調査）・東平賀貝塚（第4次調査）」(1986)
宮坂光次他　「下総姥山貝塚発掘調査予報」『人類学雑誌』42-1(1925)
村上俊嗣・小山勲　「松戸市殿平賀貝塚調査報告」『考古学雑誌』52-4(1967)
八幡一郎・西野元・岡崎文喜　『高根木戸－縄文時代　中期集落址調査報告書』(1971)
米田耕之助ほか　「祇園原貝塚　上総国分寺台発掘調査概要V」(1978)
米田耕之助ほか　「祇園原貝塚II　上総国分寺台発掘調査概要VI」(1979)
蕨立貝塚発掘調査団　『千葉市坂月町蕨立貝塚発掘調査報告書』(1966?)